

CINEX Web Journal



第9号

発行日 2022年6月1日

- | | |
|---|-------|
| ★ 複数の勤務先で異なる LMS を利用して感じたこと | 山本 伍紀 |
| ★ 異なる文化に触れて学ぶ—wheelie bin と rubbish collection— | 田中 裕実 |

複数の勤務先で異なる LMS を利用して感じたこと

東京理科大学他、非常勤講師 山本伍紀

私は古英語期（700-1100年）を中心に、英語史を専門分野としており、勤務先の大学では語学としての英語の授業を担当しています。

2020年初頭から続くコロナ禍の中で、授業のオンライン化・デジタル化（教育DX）が進んでいます。2020年度春学期中は、ほとんどの勤務先でLMS（学習管理システム）上でしか授業を実施できない事態となり、それまでアナログな紙ベースで活動していた私にはかなりのカルチャーショックでしたが、LMSの活用で採点作業が大幅に省力化できることは今でも大きなメリットです。2020年度秋学期以降、大学側・学生側のデバイスや通信環境が整ってきたこともあり、Web会議ツール（ZoomやCisco Webex Meetingsなど）を利用したリアルタイムオンライン授業の実施が各大学で概ね解禁となったため、LMSを併用して対面形式に近い感覚での授業実施が可能となりました。ハイフレックス型授業についても、この頃から各大学で検討され、スタートしたと認識しています。

Moodle、manaba、Blackboard、Canvasなど、複数の勤務先で異なるLMSを利用していると、不便と感じられる点があります。複数の大学の科目間で教材や授業内容などに共通部分があっても、1つのLMS上で既に作成・設置済みのコンテンツ（授業資料・テスト・課題・アンケートなど）を別のLMSにそのままインポート（取り込み）して再利用することはできない、という点です。それぞれのLMSに合わせて、元データを基に改めて作成・設置し直すといった時間と労力の浪費を強いられます。大学間連携と学習資源の共有・活用は教育DXを推進する上で重要な課題ですので、その基盤となるLMSは今後一本化を進めていく方が良いのではないのでしょうか。私としては、多機能で細かい設定ができるMoodleの統一使用を推したいところです。

2022年度は対面授業が基本となりましたが、コロナ禍前と違い、対面授業の中でもLMSを始めとするデジタル技術は今後も全面的に活用され続けますので、システム面は出来る限り大学間で共通させて、シンプルで効率的な運用ができるようお願いしたいと思います。

異なる文化に触れて学ぶ－wheelie bin と rubbish collection－

順天堂大学非常勤講師 田中裕実

近年国連が掲げる「持続可能な開発目標 (SDGs)」が広く取り上げられ、例えば目標 12「つくる責任つかう責任」のもと、ごみの減量に向けた、教育現場や企業、行政の取り組みがメディアで紹介されることがある。ごみの総排出量は前年度比 2.5%減^{*1}と公表されているが、コロナ禍による家庭ごみ調査^{*2}では合計 48%が増加と回答し、増加程度の回答平均量はコロナ禍前の 131.5%だった。この排出量に対し、収集運搬業務は人手不足が深刻化している。^{*3}

筆者の居住地では指定ごみ袋の容量は 15L～45L 程度だ。上手く詰め込み出し終えた時は快い達成感を味わえるが、持ち上げて運ぶ道すがら持ち手などから裂け始めた時は、補強のためすごすごと出直すことになる。あの薄いごみ袋に少々切ない気持ちになるのは、筆者が朝の時間に余裕が無いからだろうか。

イギリスの家庭で使用されているごみ箱は、多くの地域でリサイクル用(recycling)や一般ごみ用(rubbish, general waste)などに分かれるが、高さは 1m 程度、容量は 240L 位あるかなり深い容器で、頑丈なプラスチック製、しっかりしたフタが付き、底に車輪も付いて、握力が弱い人にも傾けたり移動させやすいような設計である。ごみを出す場合はこのごみ箱、wheelie bin^{*4}を、家の目の前の歩道などにゴロゴロと引きずり出す。回収車両は家の前の道路を通りながら回収するのだが、筆者がイギリスで見たごみ収集車には機械のアームのようなものを取り付けられていて、そのアームが歩道の wheelie bin を掴むような形で持ち上げ、ひっくり返して、回収車両にごみを落として移し、空になった wheelie bin を歩道に戻す、という作業を繰り返していた。日本の作業員は袋に触れることで危険に晒されるが、そのリスクを回避出来、大容量で機械回収され、さらに wheelie bin が回収車両の回収部の規格に適合した形で統一して製造されていることに感心した。ごみ箱をあえて大型化し、家庭での管理・自助努力を喚起し、回収頻度を生ごみ週一回、それ以外はほぼ隔週とするなどで、運営の効率化、ごみの減量、リサイクルに取り組んでいる^{*5} 違ったアプローチも見えて大変興味深い。

海外の異なる生活様式や考え方に触れ、言語や文化を謙虚に学び、教室現場に少しでも還元できることは無上の喜びである。教室に集う学生がこれからの時代に即し柔軟性を高めて新しいライフスタイルを目指していけるよう、今後も支援し共に学んでいきたい。

- *1 環境省(2022)「一般廃棄物の排出及び処理状況等（令和2年度）について」
- *2 BRITA Japan(2021)「コロナ禍前後での家庭ごみに関する意識調査」
- *3 公益社団法人全国産業資源循環連合会(2022)「産業廃棄物処理業景況動向調査結果について」
- *4 イギリス英語では、ごみ箱やごみ箱に捨てることを bin と表現する。写真は、Covid19 予防を呼びかけるポスター。"Bin it!"とある。



- *5 Department for Environment Food & Rural Affairs, Government Statistical Service (2022) UK Statistics on Waste.